

二〇一八年度中古文学会秋季大会 大会企画シンポジウム・研究発表要旨

第一日 十月二十日（土）

シンポジウム

《古典をいかに「発信」するか ―文学・文化・文化財―》

趣意説明

パネリスト紹介・司会

パネリスト報告

文化財の研究と発信

書誌学的視点の可能性

和歌を「近づける」ための授業実践

日本大学 久保木秀夫

広島大学 妹尾 好信

就実大学 浅利 尚民

天理大学附属天理図書館 岡篤偉久子

京都女子大学 小山 順子

〔趣意〕

古典文学・古典文化の普及・啓蒙を強化しようとする機運や意識が、近年とみに高まっている。現在の人文学を取り巻くさまざまな状況や、研究者人口が減少していく中で、後進の育成などを、むろん見据えてのことであろう。具体的な取り組みもすでに複数進行している。学会や機関レベルのものもあれば、小グループや個人レベルのものもある。中古文研究にとっても、持続的な発展のため、さらなる普及・啓蒙は重要な課題と言えよう。であるならば、そうした活動に関する創意工夫や試行錯誤を含んだ実践報告、情報共有、ディスカッションなどを行う場が設けられなければならないべきである。

幸いなことに本大会では、文化資源の実に豊富な岡山という地の利が得られた。そこで大会企画として今あらためて、美術館（博物館）・図書館・大学という異なる場、異なる立場の研究者から、「発信」にまつわる、それぞれの専門的・具体的な実践例の報告と、普遍化のための提言、及びディスカッションを行なっていく。そうすることで、内外の理解や興味、関心の裾野を広げると同時に、その実践方法をより深く議論し、模索し、共有していく、大きな契機となることを目指す。

中古文研究の成果としての、古典文学・文化の価値の発信方法をより深く探り、悲観論などに陥らない、前向きで魅力に満ちた、新たな活動の創出・参画へと繋げていきたい。

研究発表 午前の部

『源氏物語』若菜下巻住吉詣における和歌

—光源氏への返歌と独詠歌の詠者をめぐって—

大阪大学〔院〕 小林 理正

若菜下巻において、明石の君は歌を詠まない。これが現在通行している理解である。だが実は、明石の君は歌を詠んでいた。——このような想定が成り立ちはしないだろうか。

検討するのは若菜下巻の住吉詣的一幕。具体的には、明石の君、尼君、姫君の乳母が乗り合わせる「二の車」へ源氏が寄越した歌への返歌とその後の独詠歌についてである。当該二首は文脈上尼君の詠と従来解釈されてきた。だが尼君を詠者とする、明石の女御を「女御の君」と呼称したり、夫入道へ敬語を用いたりするなど不審が残る。文脈理解によって詠者を判断する従来の検討姿勢に従えば、問題のある尼君説は斥けられるべきであり、尼君とは異なる詠者が想定されるべきだろう。しかし、尼君詠者説を問題視する先行研究はない。

ところで『源氏物語』の写本の中には、御物本や大島本、明融本のように和歌の右肩に詠者注記を施すものがある。上述二本を試みに確認すると、独詠歌の詠者は明石の君とされている。また古注釈書を繙くと、旧注の中に独詠歌の詠者を明石の君とするものがあると思われる。写本の詠者注記や古注釈書の理解を鵜呑みにはできないが、詠者をめぐる解釈がかつてゆれていたと知られよう。

若菜下巻の住吉詣において描かれる源氏への返歌と其後の独詠歌を、その前後の本文を正確に読み解くことで、尼君詠者説に見出される不審の解消を図り、詠者が誰か明らかにする点に本発表の主眼はある。

柱に歌を書きつく蕉

國學院大學〔院〕 高倉 明樹子

『源氏物語』「手習」巻において、小野で出家を果たした浮舟は、図らずも自身の一周忌にまつわる話を耳にする。その話し手は、母尼の孫で、蕉に仕える紀伊守という人物であった。紀伊守の話によると、蕉は悲しみに暮れ、「見し人は影もとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとどせきあへず」という歌を、宇治の邸の柱に書きつけていたという。

川辺で水を覗きこみ、邸に上がり、柱に歌を書きつけるといふ一連の蕉の行動は、地の文ではないものの、紀伊守によってあまりにも詳細に語られていることを踏まえると、蕉側から当該場面を捉える必要があるといえる。

従来、蕉が柱に歌を書きつけることについて、亡き浮舟に対する哀傷、死者の鎮魂といった、蕉にとって浮舟の死が確定的なものとしての行為であることが指摘されている。しかし、かつて大君の死を看取り、彼女の亡骸を直接見たときは違い、突然姿を消した浮舟の死は、蕉にとって実感が伴うものではなかった。浮舟の生死が不確定であるという視点から、蕉が柱に歌を残した意味を考えなければならぬ。

柱に歌を残す、書きつけるといった柱歌の例は、物語や歌集に散見されるが、当該場面の例は、一般的な柱歌とは位相が異なる。本発表では、柱歌の意味をはじめ、「書きつく」といふ行為や、柱の象徴性などの検討を踏まえたうえで、蕉の歌には、浮舟との再会を祈る側面があることを明らかにしていく。

イニシへ／ムカシの使い分けは上代から中古へどう継承されたか

―『古今集』『後撰集』『伊勢物語』『竹取物語』『土佐日記』を例に―

愛知教育大学 田口 尚幸

上代において使い分けられていたイニシへ／ムカシの語は、中古に至り使い分けが曖昧になる、とされている。ただし、その語感については、イマと断絶感があるのがイニシへ／連続感があるのがムカシとする説がある一方で、連続感があるのがイニシへ／断絶感があるのがムカシとする正反対の説も並存し、混乱している。その收拾をめざし、拙稿「上代におけるイニシへ／ムカシの使い分け」(同(統)「同(統々)」イニシへ断絶／ムカシ連続説でわかること)でイニシへ断絶／ムカシ連続説の妥当性を説いてきたのであるが、中古でも比較的早い時期の『伊勢物語』への流れは既に論じてある。

本発表では、同じく比較的早い時期の例をあげ、上代の例も適宜交えつつ、断絶感・漠然性のイニシへ／連続感・明確性のムカシという点を確認する。また、使い分けの基準が、たとえば何年以上は／何年以下は／といった絶対的なものでなく、個々の気持ちや言いたいことに応じて変わるものである点も、併せて説く。そして、先行研究のある『古今集』については、その説とは異なる見解を示し、『後撰集』も含め、注目すべきパターンがあることを指摘する。

さらに、前回のシンポで言われた「研究の細分化と自閉化」に関し、上代―中古のアプローチは「巨視的な視座」の「確保」に当たること、および、上代―中古や上代―近世も同様なことを述べて、複数の時代・分野を跨ぐアプローチの可能性をも示そうと思つた。

研究発表

午後の部

「花散里」という呼称 ―人物造型の方法としての呼称―

東京女子大学「特任研究員」 鶴岡 祐江

花散里巻は、光源氏と腫月夜との密通が発覚する賢木巻と、須磨へ退去する須磨巻との間の巻で、緊張の中の緩衝的役割の一巻とされる。唐突に挟み込まれたこの短い巻の後、須磨巻では「花散里」が呼称化している。須磨流離に際し都に残される恋人の代表として、また今後紫の上にも並ぶ重要な存在として、この人物を印象づけるのに花散里巻は二役買っている。突如登場したこの女性の内実は、「花散里」呼称に内包される花散里巻の物語内容以外に手がかりがない。

花散里巻は、源氏の政治的逼迫を背景に、桐壺帝の御代を懐旧する心を描く小品として読まれてきたが、この巻に向き合うとき、前半に描かれる中川の女の物語も注目される。そもそも「花散里」は、姉の麗景殿女御と光源氏の贈答歌の中に詠み込まれた一語から呼称化しており、花散里巻の当該人物像は曖昧で、恋物語としては中川の女の方が印象深い。「花散里」呼称は二条東院に入る以前に集中しており、紫の上に次ぐ妻という存在意義以前の花散里像は、花散里巻の物語内容から導かれるのだが、花散里巻自体は当該人物を語る物語になっていないのである。

花散里巻の物語内容を追い、「花散里」の語のイメージも確認しながら、「花散里」呼称によって彼女がどのような人物としてイメージさせられているのか、またそれが総代的性格と評され、物語の要請の通りに造型されたと見える花散里像とどのように関連しているのか、考えてゆきたい。

浮舟物語と『伊勢物語』の川

学習院大学 [院] 竹田 由花子

『源氏物語』「東屋」巻に「かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ」という表現がある。薫の姿を垣間見た中将の君の心内語の部分にあり、薫を七夕伝説の「彦星」に喩え、たまさかの訪れでも構わないから、娘である浮舟の恋愛相手となって欲しいと望んでいる。中将の君は匂宮の姿を垣間見た時にも「七夕」という語を使っており、彼女から見た浮舟の恋物語の舞台が「天の川」に設定されていることがわかる。

しかし、薫と中の君から見た浮舟物語の舞台は異なる。薫は浮舟を亡き大君の「人形」や「なでもの」に喩えており、それを聞いた中の君は禊の儀で穢れとして流される人形を連想している。このことから、この二人の間では「御手洗川」や「みそぎ河」といった川が想起されているといえよう。つまり、中将の君側と薫・中の君側、どちらから見ても浮舟の行く末には「川」がイメージされているのだが、前者が甘美で情緒的な雰囲気の川であるのに対し、後者は呪的な川となっているのである。

これらの部分には、諸注釈にて『伊勢物語』四十七・六十五・九十五段等が参考としてあげられている。本発表では、浮舟物語と『伊勢物語』の該当章段で描かれる「川」の関係について見直し、その上で、第三部における『伊勢物語』引用について考察を試みる。

藤壺物語 語りの構造

國學院大学 大津 直子

『源氏物語』の作中人物の真意は、殊更に推し量りづらく描かれているらしい。その最たる者の一人は藤壺であろう。例えば、物語で十二首詠まれる和歌にも、正反対の解釈が成立しうる表現が散見される。「花宴」巻冒頭の一首「おほかたに花の姿を見ましかば露も心のおかれまじやは」も例外ではない。この歌は従来、藤壺唯一の独詠歌とされ、「おほかた」、ならびに「心をおく」という表現をめぐる研究史の蓄積がある。

本発表で問題としたいのは、この歌を受ける地の文「御心の中なりけむ」と、いかで漏りにけん」である。一般に独詠歌は、詠者に伝達の意思がない歌と位置づけられる。したがって、もし地の文の通り本当に藤壺が心の中に秘して詠んだ歌であれば、それが伝わる術はない。独詠歌は、「書き付く」や「独りこつ」など、漏れ伝わる経路があるからこそ、語りの組上に上ってくるのである。

従来この一文は、矛盾への指摘を想定した語り手の「弁明」と解釈されてきた。確かに、語り手の全知たることを前提とすれば、「弁明」は必要であろう。しかし、この作品の語り手はそういう存在ではない。発表者は以前、語り手が情報の出所を知らず、光源氏ら作中人物の生きた世界と語り手の現在との間に、何人もの媒介者（再話者）が存在する体裁が読み取れることを指摘した。今般は今一度この場面を取り上げ、一回繰り返されている助動詞「けむ」に着目し、藤壺物語の語りの構造について考える。

『狭衣物語』異本系本文からの一考察

— 卷二前半、狭衣・女二宮関連の独自異文より —

東京女子大学 今井 久代

多様な本文の残ること知られる『狭衣物語』のうち、異本系(第二系統、第二種とも)は、木活字十行本に対して諸本を体系つけた中田剛直『校本狭衣物語』(桜楓社)で、もつとも対立的な本文(第二種)とされている。だが、

① 原典の成立の五十年ほど後の改変本文(三谷栄一氏)

② 写本が少なく、巻ごとに別の写本に残る

などから、異本系は従来の『狭衣物語』研究では軽視されてきた。

原典を見極め、原典に最も近い本文を解釈する文学研究では、見過ごされてきた異本系であるが、これも視野に入れることで、例えば最古の写本、深川本の後発性が浮かび上がる(片岡利博『異文の愉悅—狭衣物語本文研究』笠間書院、二〇一三年)。また、ただのダイジェストや、逆に無造作な混態ではない、一貫する意図に貫かれた改変である。

本発表では、『狭衣物語』卷二前半女二宮物語での、狭衣及び女二宮を中心に考察する。異本系(高野本)は、他二系統と違うどのような語順、表現、引用によって、この系統ならではの狭衣や女二宮を描いているか。そこに、巻一の異本系(伝慈鎮本)の狭衣像との、一貫性があるのか。またそうした狭衣と女二宮によって描かれるすれ違いの物語は、『源氏物語』の影響をどう受けた物語世界を築くのか。「改変」の質を見極め評価することで、熱い『源氏物語』愛読者たちによる、物語の「改変」を誘発・許容する文学環境を再考する手がかりとしたい。